

ICCAE

news
No.29 2016.6.1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成28年6月1日発行 通巻29号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第4回JICA-JISNAS フォーラムを開催

平成28年3月15日(火)、JICA市ヶ谷6階セミナールームにて、第4回JICA-JISNASフォーラム「教育・研究力の高度化に向けた人材育成を通じた大学の外交力」が開催され、大学関係者、JICA関係者、官公庁、民間企業等より50名を超える方々に参加いただきました。

日本の高等教育機関が有する知識と技術に基づく知的支援は、開発途上国の学術振興に対して一定の貢献を果たしてきたといえます。かつて日本の高等教育機関で学んだ留学生が、帰国後に母国の行政機関や教育・研究機関の意思決定を担う立場で活躍している事実に着目すると、大学は極めて重要な「外交力」を有していると理解できます。そこで今回のフォーラムでは、特色ある取組みを進める2大学から、それぞれの現状と課題についてご講演を頂き、「外交力」の定義やあり方について議論するとともに、大学の外交力を有効に機能させるべく組織的に取り組んでいくための課題を見出すことを目指しました。

フォーラム当日は、緒方一夫JISNAS委員長による開会挨拶に続いて加藤宏JICA理事よりご挨拶をいただき、また金森紀仁農林水産省農林水産技術会議事務局 国際研究官室 研究専門職より農林水産技術会議事務局長からのメッセージをご披露いただきました。その後、白石隆 政策研究大学院大学 (GRIPS) 学長より「政策研究大学院大学の人材育成戦略」に

ついて、磯田文雄 名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院長・教授より「大学の新たな国際協力の在り方 ~アジアサテライトキャンパス学院とウズベキスタン日本青年技術革新センター~」についてご講演いただきました。

白石先生からは、米国コーネル大学において経験されたインドネシアを中心とした戦略的な人材育成の展開事例や、その経験に基づいたGRIPSにおける人材育成戦略・留学生への教育体制についてご紹介いただきました。近い将来に要職に就く可能性が高い中央官庁の中堅層に教育を提供し高評価を得ることで、大学の評価を高めるとともに質の高い学生の持続的な確保を目指すといった具体的な戦略が示されました。

磯田先生からは、名古屋大学が現在6カ国で展開しているアジアサテライトキャンパス学院の設立と現状についてご紹介頂き、現地の中央官庁の大臣や次官に留学することなく名古屋大学の教育を提供し、学位取得を支援することで、親日もしくは親名古屋大学の層を厚くするという戦略が示されました。

両先生による話題提供に基づき、縄田栄治 京都大学大学院農学研究科副研究科長、田和正裕 JICA農村開発部次長をモデレーターとして、戦略性・国の政策との連携・各機関の役割分担・相手国大学のメリット確保・人材育成・地方創成といった点から総合討論が行われました。討論の中では、「大学の外交力」の定義や、多くの大学が外交の一環として取り組んでいる地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 事業の新たな戦略、国際協力を通じた自国の地方創成への貢献の可能性などが議論されました。大学が予算的に厳しい状況にある中で、国際化や大学のレピュテーションに限らず日本の国益に寄与するような大学の戦略を考えていく必要性を確認し、総合討論を終えました。(伊藤香純)



磯田文雄教授による講演

インドネシアの大学との学術交流協定

スリウィジャヤ大学農学部との学術協力・交流に関する覚書を締結

2016年2月24日に、スリウィジャヤ大学農学部と学術協力・交流に関する覚書を締結しました。スリウィジャヤ大学インドラヤキャンパスで行なわれた締結式には、山内章センター長が署名した覚え書きを江原宏教授（協力ネットワーク開発研究領域）が携えて出席、Erizal Sodilini農学部長の署名をもって覚書の締結となりました。これまで、ICCAEとスリウィジャヤ大学農学部では、科学研究費補助金事業による共同研究を実施しており、今後とも、共同研究、研究者交流などを進めていきます。

（江原 宏）

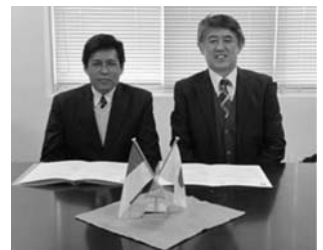


スリウィジャヤ大学農学部での調印式

ハルオレオ大学との学術協力・交流に関する覚書を締結

2016年3月22日に、ハルオレオ大学と学術協力・交流に関する覚書を締結しました。ICCAEで行なわれた締結式には、Usman Rianseハルオレオ大学長が署名した覚え書きをYulius B. Pasolon国際交流所長が携えて出席、山内章ICCAEセンター長とPasolon所長が覚え書きに署名し、握手を交わしました。現在、ICCAEとハルオレオ大学では、共同研究の一環として設置したインドネシア・クダリ市のサゴヤシパイロットファームにおいて試験研究を実施しています。調印式の後で、パソロン所長には、2015年度第4回オープンセミナーとして、「インドネシア南東スラウェシにおける陸稲品種の多様性と農業形質」と題したご講演をいただきました。

（江原 宏）



名古屋大学ICCAEでの調印式

山内章ICCAEセンター長が第60回日本作物学会賞を受賞

日本作物学会第241回講演会が平成28年3月28～29日に茨城大学（水戸）で行われ、山内章ICCAEセンター長が業績「作物根系の構造およびその可塑性の機能的意義」により、第60回日本作物学会賞を受賞しました。山内センター長は、これまで、作物個体の根の総体である根系全体を形態や機能が異なる個々の根からなるシステムとして捉え、その構造および土壌環境に対する発育的応答を定量的に解析し、その機能的意義や作物生産における役割の解明に取り組んできました。特に土壌水分ストレス条件下で発揮される作物根系の発育的可塑性が作物個体の耐旱性にとって重要な形質となっていることを明らかにした一連の業績が評価され、今回の受賞に繋がりました。これらの研究成果は、ストレス環境条件下での作物栽培技術の改善や根系形質に注目した作物育種への応用に繋がるものと期待されています。（榎原大悟）



授賞式の様子

JSPS「二国間交流事業（ケニアとの共同研究）」の採択

名古屋大学、島根大学、国際農林水産業研究センター（JIRCAS）、ケニア農畜産業研究機構およびケニア国家灌漑公社による国際共同研究として提案した「ケニアの大規模灌漑畑作地区におけるイネの塩害克服に向けた課題解決型研究」がJSPS「二国間交流事業（ケニアとの共同研究）」（2016～2017年度）に採択されました。ケニアでは、コメ増産に向けて、政府が開発した大規模灌漑畑における灌漑陸稲栽培の普及が進められています。これらの大規模灌漑畑の多くは乾燥地や半乾燥地にあり、灌漑に伴う地表への塩類集積が大きな問題となっています。本研究では、ケニアのブラ・ホラ灌漑地区において、土壌の物理化学的性質や塩の動態とイネの塩害との関係を調査し、現地に適した塩害回避栽培技術の開発に取り組みます。また、イネの耐塩性関連形質として重要な根におけるNa⁺排除能の発現に及ぼす土壌水分条件および施肥条件の影響を調査し、現地の栽培環境に適した耐塩性イネ品種に必要な生理形態的特徴を明らかにすることを目指しています。

（榎原大悟）

着任挨拶

山根 裕子 日本学術振興会RPD特別研究員

今年度より日本学術振興会RPD特別研究員として『地域研究を軸とした地域密着型の新しいアフリカ農業開発支援の手法創出』という実践型の地域研究をケニアのビクトリア湖岸地域に点在する稲作地域を対象に開始します。この地域では2010年から現地の稲作の実態を明らかにする目的の研究を継続してきました。この研究では、対象地域の農業と農村社会の実態を把握したうえで、実態に即した適正技術を検討し、導入を図ることを目的としています。アフリカでは農業支援の多くが独特の地域社会や農業の特性に合わず根付いてこなかったと言われており、この研究を通じアフリカの農村と農学を結ぶ方法を考えます。



略歴 2005年京都大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了、京都大学大学院農学研究科研究員、名古屋大学農学国際教育協力研究センター研究機関研究員、同国内客員研究員、三重大学非常勤講師、愛知淑徳大学非常勤講師等を経て、2016年4月より現職。

ダニエル・メンゲ 研究員

私は、2016年3月に名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程後期課程を修了し、一時帰国後、同年5月から研究員としてICCAEで研究を続けることになりました。私は、これまで、陸稲ネリカ根系の乾燥ストレスに対する反応の品種間差異および施肥管理との相互作用に関する研究に取り組み、栽培環境に適した品種の選抜と栽培管理の組み合わせにより、天水畑条件下における陸稲の生産性向上が可能であることを明らかにしてきました。今後は、これまでの研究で見出した陸稲ネリカ品種が持つ耐旱性に関わる根系形質の機能をアフリカの栽培現場において実証していきたいと考えています。また、新しい実験技術を身につけ、環境ストレスに対する根の生育反応と養分吸収との関係解明にも取り組むつもりです。



略歴 1985年生まれ。2008年12月ケニヤッタ大学理学部卒業、2010年4月文部科学省奨学金留学生として来日、2013年3月名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程前期課程修了、2016年3月同大学院生命農学研究科より博士(農学)を取得し、2016年5月より現職。

菊田真由実 研究員

2016年4月より、研究員として採用され、JST・JICA地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS)「テラードメード育種と栽培技術開発のための稲作研究プロジェクト」に参加させていただいています。学部、修士・博士課程では、インドネシアやケニアにおいて低土壌水分条件下でのイネの生産性向上について、主に栽培管理の点に着目し、研究に取り組んできました。これまでの研究経験を活かし、今後は、ケニアに滞在し、栽培試験および現地調査を行う予定です。現地の関係者や研究者らとともに、ケニアのコメの生産量拡大に貢献できるよう、研究活動を行っていきたく考えております。どうぞよろしく願いいたします。



略歴 2011年に高知大学農学部農学科を卒業。2013年に高知大学大学院総合人間自然科学研究科修士課程を修了。2016年3月に名古屋大学大学院生命農学研究科にて博士号(農学)を取得後、2016年4月より現職。

平成28年度JICA課題別研修「アフリカ地域 稲作振興のための中核的農学研究者の育成」実施について

本研修は、昨年度より第2フェーズ(3年間)として実施しています。2016年は、6月29日～8月5日、サブサハラアフリカ諸国の12ヶ国より15名を受け入れる予定です。前半のJICA中部および名古屋大学におけるコア研修では、稲作に関わる基礎的な知識や技術、PCM手法、日本における稲作振興のための技術開発と政策の関係、名古屋大学フィールド科学教育研究センター東郷フィールドでの圃場の見学、稲作の機械化に関する講義と実習、愛知県新城市の四谷千枚田の見学等を予定しています。また、後半の個別研修では、例年同様JISNAS会員大学にご協力いただき、受入の先生方から指導を受けながら専門性を高めた上で、最後にJICA筑波において、研究を効果的に進めるためのリサーチプラン立案に関するワークショップとリサーチプラン発表会を持ち、JICA筑波所管の他の稲作研修参加者も交えて議論するプログラムを企画しています。

(江原 宏)

参加予定国：ブルンジ、コンゴ民主共和国、エチオピア、ガーナ、ケニア、モザンビーク、ナイジェリア、スーダン、シエラレオネ、タンザニア、ウガンダ、ザンビア

外国人客員准教授紹介

Bangladeshでの安定生産を可能にするイネ新品種の開発を夢見て

シェリー・イシュラット・ジャハン
 Bangladesh農業大学准教授 (Bangladesh)
 外国人客員准教授 (プロジェクト開発研究領域)
 (任期: 2016年2月1日から2016年3月30日)



農学国際教育協力研究センター客員准教授として再び赴任でき、とても嬉しく、また光栄に思います。Bangladeshの主食であるイネの生産量は時代とともに大きく改善してきましたが、乾燥や塩害、洪水、高温や低温障害、サイクロンによる被害等により、反収は未だ低い水準に留まっています。これまでに私たちは“Climate resilient cropping pattern”など、これらの障害を克服するための栽培技術の確立を試みてきました。近年は、乾燥や高温ストレスに対するイネの耐性品種育成を目指して研究に励んでいます。この2ヶ月の滞在期間中に、私はそれを実行するための知識や技術をできるだけ多く身につけられるよう懸命に努力しました。ストレス耐性を有する新品種の開発は、Bangladeshの農家に利益をもたらし、また食糧の安全保障に大きく貢献します。こういった国を豊かにしようとする一個人の試みや努力の積み重ねが、最終的にはBangladesh稲育種開発センターの設立といった大きな実を結ぶ結果に繋がると信じています。私は生涯にわたり日本の研究者との協力関係を築き、この大きな夢の実現に貢献できることを切に願っています。滞在中の皆様からのご指導、ならびに温かいサポートに心より感謝申し上げます。

略歴 1975年Bangladesh生まれ。2001年Bangladesh農業大学卒業、2003年同大学大学院修士課程修了、2013年名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程(後期課程)修了および博士(農学)取得。2002年Bangladesh農業大学農学部非常勤講師、2004年同大学農学部講師、2006年同大学農学部助教、2013年同大学農学部准教授、2014年4月~2014年9月名古屋大学農学国際教育協力研究センター外国人客員准教授を経て現在に至る。

海外ゲストの講演紹介

マリー=クリスティヌ・ヴァン・ラベケ (Gent大学生物工学部植物生産学科教授)

1月14日(木)に、『環境ストレスに対する資源植物の適応』をテーマとして2015年度第3回オープンセミナーを開催し、ベルギー王国より招いたヴァン・ラベケ教授にご講演いただきました。「非生物ストレス耐性の選抜に向けた園芸作物の生理的反応」と題したお話しの中で、乾燥による有効水の低下、低温による細胞の脱水、塩害による浸透圧ストレスやイオン毒性など様々な非生物的ストレスに対する抵抗性の成立要因について解説いただき、また、ストレスの回避性や耐性の差異を検出するための生理的、生化学的解析手法について、果菜や花卉を用いた研究の実例をあげてご紹介いただきました。(江原 宏)

ルイス・イコチア・サラス (ラ・モリーナ農業大学水産学部教授)

4月18日(月)に、ペルー共和国よりイコチア・サラス教授を招き、2016年度第1回オープンセミナーとして講演会を開催しました。「エルニーニョ・南方振動と農水産業への影響」と題した講演の中で、エルニーニョがどのように発生し、海洋および大気の状態に影響を及ぼすのか、それによる海洋生物の分布の変化や作物の生産と関連産業への影響について解説いただき、経済活動の損失や自然災害を軽減するために、信頼性の高いエルニーニョ予測に向けた課題と方策について情報を共有させていただきました。(江原 宏)

オープンセミナー (2015年12月~2016年5月)

回数	日時	テーマ	講師	所属
2015年度 第2回	2015年 12月15日	アフリカ開発の阻害要因と日本の役割	二木 光	元JICA国際協力専門員
第3回	2016年 1月14日	非生物ストレス耐性の選抜に向けた園芸作物の生理的反応	マリー=クリスティヌ・ヴァン・ラベケ	ベルギー・Gent大学生物工学部 植物生産学科 教授
		塩ストレス、アルミニウムストレスに対するサゴヤシの生育および生理反応	江原 宏	ICCAE協カネットワーク開発研究領域 教授
第4回	2016年 3月22日	インドネシア南東スラウェシにおける陸稲品種の多様性と農業形質	ユリウス B. パソロン	インドネシア・ハルオレオ大学国際交流所長/ 農学部 准教授
		Bangladeshにおける稲作の現状・課題と将来展望	イシュラット J. シェリー	Bangladesh農業大学 准教授/ICCAE 客員准教授
2016年度 第1回	2016年 4月18日	エルニーニョ・南方振動と農水産業への影響	ルイス・イコチア・サラス	ペルー・国立ラ・モリーナ農業大学水産学部 教授